

【悲劇の政治家 安駟寿の書】

須永文庫には、朝鮮時代末期に活躍した開化派の政治家で、悲劇的な最期を遂げた安駟寿の書が4点あります。

須永が安駟寿と初めて会ったのは明治21年3月30日と思われます。

3月30日の『須永元日記』をみると欄外に「安駟寿なる者は目今、同国（朝鮮）公使館の官人にしてひそかに往来すと云ふ」とあります（原文は漢文）。

安駟寿について『須永文庫資料集 明治21・22年 須永元日記』に書いたこの日の注釈を再掲します。

安駟寿（一八五三～一九〇〇）。『韓国近代外交事典』によれば科挙の武科に及第後、一八八四年、岡山県で紡績技術を学んだ。帰国後の一八八七年四月、外衙門主事に任命され、六月、駐日翻訳官に任命された。銀本位制への貨幣改革の試みにも主導的な役割を担った。（中略）高宗廃位事件に連座、日本に亡命した。帰国後、絞首刑に処せられた。

安駟寿は没落両班の出身でしたが、宋京垣「韓末 安駟寿の政治活動と対外認識」（『韓国思想史学』8、1997年。原文は韓国語）によると、王妃の一族である閔泳駿との関係で日本への留学や官界での出世が可能だったということです。

【盛唐の七言絶句4点】

須永文庫にある4点は、いずれも盛唐の七言絶句を書いたもので、日本人にもよく知られた詩ばかりです。一枚の額にまとめて表装されています。

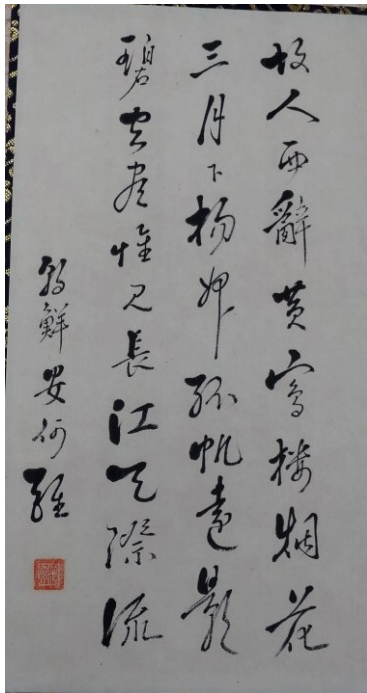


図1

図1は額の一番右に貼られています。

句ごとに翻刻すると以下ようになります。

故人西辞黄鹤楼

烟花三月下扬州

孤帆远影碧空尽

惟见长江天际流

朝鮮 安何醒 印

これは李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」で、起句の六字目が異体字なのでしょうか、ウ冠に「鳥」の字になっています。

落款の「何醒」は安駟寿の号です。

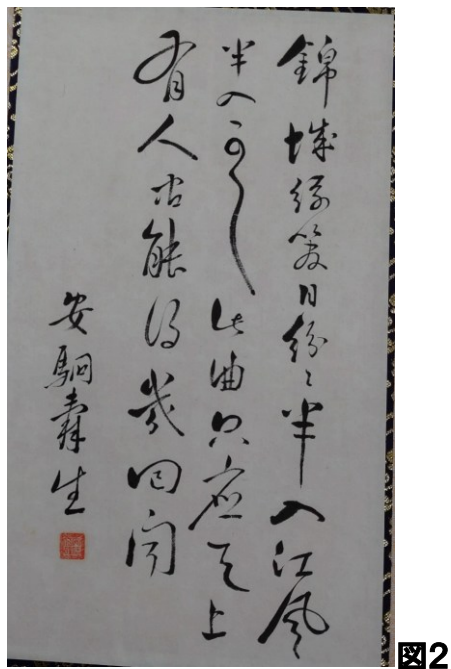


図2はその左に貼られています。

翻刻します。

錦城絲管日紛紛

半入江風半入雲

此曲只應天上有

人間能得幾回聞

安駟寿生 印

これは杜甫の「花卿に贈る」です。

その左に貼られた図3を翻刻します。

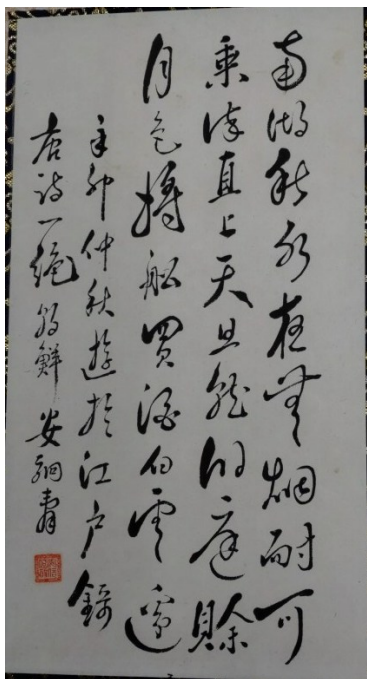


図3

南湖秋水夜無烟

耐可乘流直上天

且就洞庭賒月色

將船買酒白雲邊

辛卯仲秋、遊於江戸、録唐詩一絶 朝鮮 安駟寿 印

これは李白の「族叔刑部侍郎曄及び中書賈舍人至に陪して洞庭に遊ぶ 五首 其一」です。

承句の「耐」は副詞で「いかん - ぞ」と訓読みし、反語と思われます。

【明治24年に東京でしるす】

落款にある辛卯は明治24年と思われます。宋京垣の前掲論文などによると、前年暮れ、安駟寿は朝鮮の貨幣改革の調査などのため来日しました。

落款によると、安駟寿は明治24年仲秋の頃は東京にいてこの書をしるしたようです。

さらに左の図4を翻刻します。

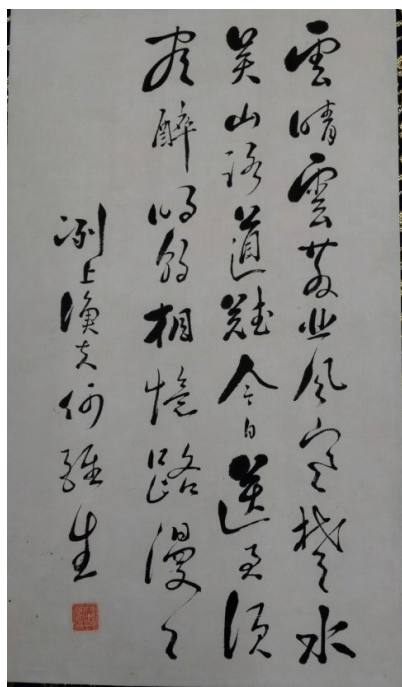


図4

雲晴雲散北風寒

楚水吳山路道難

今日送君須盡醉

明朝相憶路漫漫

洎上漁者 何醒生 印

これは賈至の「李侍郎の常州に赴くを送る」です。

4点とも「安何醒信（カ）」という朱文印が捺されています。

2025年9月20日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>